

オール電化・雨月物語

青柳碧人

夢応のリギヨ

1

「うわっ!」

びびんと、西山にしやまのロッドがしなった。

「かかった。おいこれ、かかっているよな?」

たしかにかかっている。揺れる二人乗りカヌーの上で、正武雄二まさたけゆうじは思わず舌打ちをした。腕時計をちらりと見る。午後二時五十一分。

何度来ても俺のルアーにはかからなかった。それがどうしてド

素人しらうとのこいつにかかるんだ。——しかも、こんなタイミングで。

「何、ぼんやり見てるんだ。手伝ってくれ」

「まだかかっただけじゃないか。慎重に引き寄せろよ」

「ひゃっは。すげえ引きが強い! さすが日本最大の淡水魚だ」

まあいい、気を取られているから、かえって好都合だ。今のうちにせいぜい人生を楽しんでおけ。

西山はその後、イトウとの格闘をたっぷり十分ほど楽しんだ。夢

中になっている西山に気づかれることなく、雄二は注射器の準備を整える。獲物えものに逃げられたらすぐにでも雄二は実行するつもりだったが、普段の粗忽そこつさをまったく見せず、西山は堅実にルアーを引き、イトウをカヌーに引き寄せた。灰色の水面近くに、銀色の体が見え隠れする。

「おい、タモ。早く」

雄二はタモを取り出し、カヌーの縁に身を乗り出す。獲物が近づいたところを見計らって、その魚をすくいあげた。

「やったぜ！」

船底に横たえられたイトウの巨体を見下ろし、西山はガッツポーズをした。

「おい、写真撮ってくれ。あー、その前にルアーを外してくれ」

偉そうに命令してくる西山の背後数百メートル、藪やぶの向こうに、人工物の赤が見えた。間違いない。ラーズ・フィッシングの客だ。雄二はさっとオールを取って藪の陰にカヌーを動かす。

「なんだよ、急に」

「他の客に見られないようにだ。なんて言ったって、許可取ってないんだからな」

「だから許可を取ってくりやよかつたじゃないか」

そんなことができるものか。早く済ませてしまおう。雄二は西山

に背を向け、ポケットに手を入れる。

「おい、あれはなんだ？」

雄二の言葉に西山は向こうを振りかえった。手早くその首筋に注射器を突き立てる。

「痛っ、何すんだ……えっ、あっ……」

西山はがくりと膝をつく。その脇で釣り上げられたばかりのイトウがどたりどたりと動いている。

「まさたけ……おま、おまえ……」

呂律も回らなくなっていた。手足ももうしびれているだろう。

「悪いな西山。お前に生きていられると困るんだ」

雄二はしゃがむと、西山の体の下に両手を入れた。毎週ジムで鍛えている。西山くらいの体重なら軽々動かせる。

「やめ……てくれ……」

力を込めて西山の体をカヌーの縁から川へ落とす。ざぶんと飛沫が上がるが、落ちた本人はもがく様子もない。

さて、とうごめく魚を雄二は見下ろした。

「ロッドもまた捨てるとして、お前が引つかかって見つかったら、おかしいだろうな、やっぱり」

針を口から外されながら、イトウはじっと雄二の顔を見ているようだった。

瀬田川リギョがコーヒーまみれになって倒れているのを谷口春樹たにぐちはるきが発見したのは、六月二十一日の朝十時すぎのことだった。

リギョは気鋭きえいのアーティストだ。小さいころから魚が好きで、魚の絵ばかり描いていたという。魚をモチーフにしたグラフィックアート動画を自身のサイトにアップしていたが、それがある日、著名なプロデューサーの目に留まり、アパレルのデザインや、コマースヤルの映像にも使われるようになった。ここ数年で海外にもその名が知られるようになり、シンガポールに新たに作られるホテルのオブリジェを手掛けるてがことになっている。

昨晚リギョは溜ためまっている仕事を片付けるために、オフィスとして借りている一軒家に宿泊した。今朝は九時半からオンラインでミーティングをする予定になっていたが、時刻を十分過ぎてもアクセスしてこなかったのだった。

春樹は不安に駆かられ、急いでスクーターに乗ってオフィスへ行った。すると、床に仰向けになったリギョの姿が目飛び込んできたのだった。

「リギョ、リギョ！」

すぐさま飛びついて体を揺すぶったり頬を叩いたりしたが反応がない。服にはコーヒーのしみがついていて、そばにマグカップが転がっていた。春樹は、先週の月曜に、「なんだか今朝、激しい頭痛がしたんだよね」とリギョがぼやいていたのを思い出した。

リギョのマネージャーになって五年。恋人となってからは八年。風邪一つ引いたことのない彼がそんなことを言うのは珍しかったから、春樹は大いに心配したが、

「ま、大丈夫でしょ」

いつものように笑い飛ばすリギョにごまかされ、そのままにしてしまっていた。

春樹は救急車を呼び、かけつけた救急隊員たちとともに病院まで同行した。その日から数日間予定に入っていた打ち合わせのスケジュールをすべてキャンセルすることも忘れなかった。

一時間後、リギョが倒れた理由を医者から知らされた。

「リギョは助かるんですか？」

白衣をつかんでくる春樹を、石鍋いしなべというその医師はまあまあ、となだめた。

「リギョというのは？」

「ああ、ええと、瀬田川リギョというんです。せたこうた瀬田浩太の仕事上の名前です。彼は著名なアーティストなんです」

「アーティスト。そうでしたか。あなたはマネージャーさんか何かですか？」

「そうです。そして、パートナーでもあります」

「ああ」と医者はうなずいた。同性のパートナーなどもう、珍しい時代ではない。

「こちらをご覧ください」

石鍋はレントゲン写真の一部を示す。頭蓋骨の一部に、白い影がある。

「これが腫瘍なんですね。どうして今まで症状が出なかったのか不思議ほど大きくなってしまっています。二十四時間以内に手術に取り掛からなければ、命が危ない状況です」

「だったらすぐ、手術をしてください！」

「それがですね」

その表情には、今から悪いことを言うぞ、という雰囲気ただよが漂っていた。

「瀬田さんの場合、リーマス型腫瘍と言って周囲の血管と複雑ゆに着ちやくしています。摘出てきしゆつにはかなり高い技術が必要になってきます。当院の医師ではとても太刀打ちたちうができず、日本でもこの手術が可能むつかないな医師は私の思い当たる限り二人しかいません。一人は稚内脳外科センターに、もう一人は福岡の新わかば総合病院というところにいら

っしやいます。二人ともかなりお忙しくされており、ほぼ毎日、オペの予定が入っているかと」

「そんな。それじゃあすぐに手術してもらえないんですか？」

「落ち着いてください。瀬田さんの場合は急を要します。稚内の正武先生は以前、予定を変更して同様の患者を先に手術してください。た前例がごさいますので、お願いすれば大丈夫かと。ただし、その前にまず、二つご確認いただかなければならないことがごさいます」

「なんですか」

「一つは、費用のことです。非常に難易度の高い手術ですので、最低でも一千万円はかかりますが」

「大丈夫です」

春樹は即答した。世界にも活躍の場を広げている瀬田川リギョにとつては、けして高い手術費ではない。どこか予想していたようで、石鍋はあまり驚かなかった。

「二点目です。正武先生は北海道を離れるわけにはいかないのです、今回の手術は遠隔えんかくになるかと思えます」

「遠隔……?」

「GALLENOSガレノスという遠隔手術システムがあるんです」

手術台に横たえられた患者の周囲に、ペイシエント・カートという手術に必要な道具を備えた機械が配置される。執刀医は離れた場

所でサージョン・コンソールと呼ばれる専門の端末の前に座り、手術室の映像を見ながら、あたかも目の前に患者がいるかのように手を動かす。機械は指示通りに動き、手術を執行するという。

「そんなことができるんですか？」

春樹は信じられない思いで訊ねた。

「遠隔手術システム自体はもう何十年も前から行われています。しかし従来は機械の動きが遅かったり、限定的だったりして、あまりうまくいかないケースもありました。さらに、細かい手作業のために現地にも最低一人外科医を配備する必要がありました」

GALENOSはそれにも必要ないほど高い技術を搭載とっかいてしているという。患者側の機械はMRIのような円筒形をしており、現地の医者は麻酔をかけた患者をこの中に入れた後は何もすることがなく、むしろ、わずかな振動や温度の変化が影響する可能性があるため、手術中にオペ室に入ることも許されないらしい。

「正武博士は若くしてGALENOS開発の中心的役割を果たした外科医の先生で、今までの成功率は百パーセントですよ」

「百パーセント……それなら、ぜひお願いします！」

「わかりました。では、正武先生にお願いしてみましよう。今、関連書類を用意しますのでお待ちください」

二日後、春樹は朝一番で病院へ駆けつけた。

「リギョの意識が回復したって本当ですか？」

白衣につかみかかる春樹を、まあまあと石鍋はなだめた。

「ええ。午後九時ごろのことです。手術が終了しておよそ三時間後ですね。その後また就寝しゅうしんされ、今朝は少量ですが、朝食も召し上がられました。驚くほどの回復力です。手術は成功したとっていいでしょう」

「会えますか？」

「手術したばかりですので十五分だけとさせていただきます。脳が傷ついている状態ですので、感情的な刺激を与えないように」

十五分でも会えるのは嬉しかった。

十階の大きな個室に、リギョは収容されていた。大型のテレビにパソコン、バスルームにトイレまでついていて、ビジネスホテルよりも居心地のよさそうな部屋だった。

「春樹……」

頭に包帯を巻いてネットを装着したリギョは、春樹の顔を見て小さくつぶやいた。その顔を見ただけで、春樹は涙がこぼれてきた。

「リギョ……よかった。ごめんね、こないだ頭痛が言ったと

きに気づいてあげればよかった」

「いいんだ。それより、仕事は？」

「全部キャンセルしておいた。今後半年は休んだほうがいいからと
正武先生に言われたから。全クライアントにはもう連絡してある。
みんな事情を察してくれたよ」

嘘だった。リギョの仕事を心待ちにしているクライアントからは
さんざん文句を言われた。だが本当のことを告げれば、リギョはす
ぐにでも仕事を始めるというだろう。命を縮めるようなことは避け
なければならぬ。思えばリギョはこの数年、働きづめだった。休暇
を取るいい機会でもある。

リギョは春樹の顔から目をそらし、天井の一点をじっと見つめて
いる。仕事のことを考えているのだろうと春樹は思った。

しかし――。

「正武先生ってというのは、俺を手術してくれたあの外科医のことだ
よね？」

「そうだよ。本来、昨日は札幌の病院の別の患者のオペが入ってい
たのに、リギョのレントゲンを見て緊急を要することを知ったんだ
そうだ。本来の患者を別の医者に任せて、リギョのほうを担当して
くれたのさ」

春樹は昨日の手術が始まる直前、モニター越しに顔を合わせたそ

の医者顔を思い出す。

〈初めまして。稚内外科医療センター主任外科医、正武雄二です〉

真っ白な背景の画面に現れたのは、柔らかそうな髪の毛をちょうど真ん中から分けた、色白の男性だった。肩幅が広く、胸板も厚く、顔と体のアンバランスさが印象的だった。

〈本日午後二時より、瀬田浩太さんのオペを担当させていただきます。レントゲンを見る限り、かなり難しい手術になりそうですが、G ALENOSの技術をもってすれば大丈夫だと思います。縫合^{ほうごう}まで含め、四時間ほどかかる見込みです。よろしくお願いいたします〉

淡々としているがたしかな聡明^{そうめい}さを感じさせる口調だった。信頼できる人だ。春樹はそう直感し、ただ、よろしくお願いしますとだけ言った。

「稚内の病院にしながら、遠隔システムでリギョの手術を成功させたんだよ。すごく優秀な先生にお願いできてよかったね」

「ああ、うん……」

リギョは相変わらず白い天井を見上げたまま、上の空^{うわ}のように答えた。脳の手術をしたばかりなのだから、あまり難しい話をするのはよくないだろう。

「ごめん。また明日来るから」

部屋を出ようとする春樹の手が、ぱっと握られた。リギョがこち

らを見ていた。

「待つて。聞いてほしい話がある」

「……なに？」

春樹はリギョに向き直った。

「昨日、手術が終わって気が付いたあと、俺も挨拶あいさつさせてもらったんだ、正武先生に。先生の顔を見た瞬間、俺、驚いて吐きはそうになっちゃった」

「どういうこと？」

春樹の顔を見て、リギョは上唇を震わせている。

「言いくらいなことだね？」

「こんな話、信じてもらえないわけはない」

「何を言われても驚かないから、話してみて」

「ああ……うん……そうだよな。春樹は俺のことを理解してくれている。話すよ。俺、実は意識を失っている間、変な夢を見たんだ」
そしてリギョは、その奇妙な体験について語りだした。

*

気づいたら一人で、俺はどこかの湿原しっげんを歩いていた。右も左も背の高い藪で、空には雲が立ち込めていて、重苦しいのにどこか解放

された気分だった。

ああ、ずっと行きたかった北海道だ、って直感した。

しばらく歩いていくと、緩やかに流れる川に当たったんだ。泳ぎたいな、ってふと思ったら、次の瞬間にはもう川の中にいた。

不思議なことに水の中でも息苦しくなくて、服を着たままぐんぐん泳げていた。

だけど、知ってるだろ？ 俺、魚は好きで普段から魚になる妄想はよくするけど、泳ぎはあまり得意じゃない。ああ、俺も魚に生まれていたら、本当に楽しく泳げたんだろうなって悔しくなったんだ。すると、水の底のほうから一匹の大きな魚が泳いで上がってきた。イトウだった。

春樹には前に話したことがあるよな？ 北海道の川にすんでる、サケ科の魚だよ。大きいのは一メートルを優に超える、日本最大の淡水魚。

俺の前にやってきたのは、一メートル五十センチはあったんじゃないのかなあ。驚いたのは、そいつに、赤い服を着た変なおっさんがまたがっていたことだ。

おっさんは俺に言った。

「魚になりたいんだろう？ 魚にしてやるよ」

そうしたら俺はもう、イトウになっていた。

人間よりはるかになめらかに、素早く泳げるんだ。魚になることがずっと理想で魚の絵を描き続けてきたからな。俺は本当に幸せで、すいすい泳いだよ。

しばらくしたら腹が減ってきた。ちようどいい具合に目の前に、小エビみたいなものが泳いでいるのが見えた。

食の好みまで、イトウになっていたんだろうな。俺はそいつにばかりと食いついたんだ。とたんに口の端に激痛が走った。ぐいっと引っ張られるんだ。

ルアーにかかっちゃまったんだってことはすぐにわかったよ。死に物狂いで俺は針を外そうと思った。ラインを切っちゃまえばいいんだとも思った。だけど魚って不便で、手足が使えない。

俺はついに水面近くまで引っ張られ、タモにすくわれてしまった。赤いカヌーだったよ。俺を釣り上げたのは若い男で、興奮して、タモで俺をすくいあげた男に写真を撮りたいからまずルアーを外してくれ、なんて言っていた。

俺は船底でのたうち回りながら、なんとか命を保っていた。知ってるか？ エラ呼吸って水から出されたらすげえしんどいんだぜ。頼むから水の中に戻してくれ。そう願っていたら、とんでもないことが起きた。

タモで俺をすくった、ごつい体格のほうの釣り人が、ペンみたい

なものをもう一人の首筋に突き刺したんだ。刺されたほうは驚いて振り向いたけど、すぐに膝からくずおれた。何か言っていたようだが、俺には聞こえなかった。

たぶん、薬物を注射されたんだろうと思う。思うように動けなくなったそのつを、ごついやつはカヌーから落とした。まだ息はあつたろうが、あれじゃあ溺れちまつただろうな。

ごついやつは、そのあと、「お前が引つかかって見つかったらおかしい」みたいなことを言つて、俺の口からルアーを外し、俺を川にリリースしたんだ。

エラに、たっぷり酸素を含んだ水が入ってきて生き返つた気分だったね。もう絶対何も口に入れるもんかと誓つて、しばらく泳いでいた。それにしても、えらく醜い人間の姿を見たもんだ——と考へながらな。

*

「変な夢だと思うだろう？」

「そんなことはないよ」

春樹は答えた。こういう変わったところが、リギョのインスピレーションの源みなもとなのだから、ネガティブな反応はしないことにして

いるのだ。

「俺だっただだの夢だと思っさ。ところが昨晚目が覚めて、あなたの手術をしてくださった方ですよとモニター越しに紹介された正武先生の顔を見て、俺は吐き気をもよおしたんだ。カヌーの上でもう一人の男に注射して川に放り込んだ、ごつい体の釣り人だったからだ」

「それは……よく似ていたってこと？」

「違う！」リギョは大声で否定した。「似ていたなんてもんじゃない。本人だ。サラサラの髪の毛も、ごつい体と顔の小ささのバランスがあってないところも。何より、右目の下の二つ並んだほくろ……っっ！」

リギョは後頭部の左側を抑える。腫瘍があると石鍋が言っていた部位だ。

「リギョ。あまり興奮しないほうがいい」

「俺はあれが夢だと思わない。水の感触もエラ呼吸の感じも、俺は北海道の川を泳ぐイトウだったんだ」

「わかったから！」

「お願いだ春樹。正武先生の身辺を調べてくれ。あの人……殺人を犯したに違いない」

三日後に学会に提出する予定の論文の執筆が、第二章で停滞して
いた。ディスプレイの向こうで引用論文のソースを張り付けたとこ
ろで、もう二十分も止まっている。

時計を見る。午後二時三十分。

本来、午後四時のセンター長との打ち合わせまでは時間が取れる
はずだったが、三時に珍客ちんきやくが来ることになってしまった。

刑事さんがお話を聞きたいそうです。——そう告げに来た総合受
付の竹名敏子の不審そうな声が耳よみがえに蘇る。「先生、何かしたんです
か？」とても訊きたそうだった。

不安がないわけではない。だが、ばれるはずはない。僥倖じょうしんを味方
にした計画に、ぬかりがあるうはずはない。

内線知らせるベルが鳴った。受話器を取る。

「正武先生。刑事さんが見えです。少し早いのでお待ちいただき
ますか」

「いや、いい。通してくれ」

気がかりなことは早く終わってほしい。そのほうが論文に集中で
きる。

二分もしないうちに、ドアがノックされた。

「どうぞ」

ドアを開けて入ってきたのは、側頭部に白髪の混じる小柄な刑事だった。年齢は五十を過ぎたばかりだろうか。

「お忙しいところをすみませんねえ、北海道警旭川方面・稚内警察署の鶴淵つるふちといいます」

微笑ほほえみながら警察バッジを見せてくる。まるで商売人のように物腰が柔らかい。

「正武雄二です。どうぞ」

雄二が勧めた椅子に腰かけると、刑事は部屋の中をきよろきよろと見回した。

「いろんな機械がありますなあ。先生は、世界的な脳外科医だと言うことで」

「世界的などというのは大きいです。遠隔医療システムに明るいと
いうだけです」

「遠く離れた病院の患者さんの手術を行うんですよね」

「いや、実は医大に入学する前、工学系の大学に通っていたことがありましてね。それで、他の医者よりくわ詳しいというだけですよ」

「はあ、頭がよろしいんですね」

「工学のほうは中退です。それより刑事さん、本題に入っていただけ
けますか。あまり時間もないものでね」

パソコンのディスプレイをちらりと見る。鶴淵刑事もまたその視線を追い、「こりや失礼」とポケットから小型端末を取り出した。

「六月二十二日、午後四時頃、猿払村を流れる猿払川にて、男性の遺体が見つかったんですね。男性の身元は西山辰、三十四歳。札幌はスキノの飲食店に勤務しておりました」

どこかで予期していたことだが、心臓の鼓動が早くなるのを雄二は感じていた。どうやって西山との関係にたどりついたのか――。

西山が釣り用のジャケットを着用したまま溺死しており、付近の川岸に大型魚用のルアーがついたロッドが引っ掛かっていたことや、発見場所から百メートルほど離れた岸に荷物が残されていたことなどを鶴淵刑事は告げた。雄二の焦燥に気づいている様子はない。

「つまり、川岸で釣りをしていたときに誤って足を滑らせて川に落ち、溺れて死んでしまったと、我々はそう判断したわけです」

「この時期の猿払川というと、イトウですか」

雄二が言うと、鶴淵はおや、という顔をした。

「先生もやるんですか」

「昔ね。なんていったって日本最大の淡水魚。あこがれる釣り人は多い。ここ十年は忙しくて行っていませんけど」

「なるほど。……まあ、我々も西山がイトウ釣りにやってきて溺れ死んだと踏んだんですが、検視で妙なことがわかったんです。首筋

に、注射針を刺された跡があった。詳細な検査の結果、西山は死ぬ直前に薬物を注射されていたことがわかったんですよ」

雄二がまさに打った薬物の名を、鶴淵刑事は告げた。致死量^{ちしりょう}は極めて多いものの、打てばすぐに全身がしびれてしまう。特に脳の近くに打つと、口の筋肉も動かしづらくなり、この状態で川に落とされてしまえば溺死は必至だ。

「なるほど。その薬物のことを聞きに私のところへ来たと」

雄二はとぼけて言った。

「この薬物はロシア政府が反対勢力の団体に使ったことでマフィアに知られるようになり、今では日本の繁華街^{はんかがい}でも出回っているようです。特にススキノでは取引が盛んにおこなわれているとか」

「先生。それは存じ上げております」

鶴淵刑事は肩をすくめる。

「失礼。警察の方のほう詳しいですね」

「ええ。おっしゃるとおり、薬物自体を手に入れるのは医療関係者でなくても、ススキノ裏社会^{ようかい}に通じている者なら容易でしょう。連中は覚せい剤を扱っていますから、注射するのもお手の物だ」

「わかりましたよ。誰かが西山をイトウ釣りに連れていき、隙^{すき}を見て薬物を注射し、溺死に見せかけるために川に落とした」

「そういうことです」

「しかしわからないな」雄二は首を振って見せた。「どうして私のところに来たんですか？ 私は別にその西山という男を知りません」

願望も含めて言ってみたが、それほど樂觀視できる状況ではなかったようだ。

「先生が札幌にいらしたときのお知り合いですよ」

鶴淵は端末を操作して見せた。十七年前の札幌、《ペナンビーチ》の店内、まだ医者になって間もないころの雄二と、ボーイの西山がそろって写っている。どうやって見つけたのか？

……白を切るのは不自然だろう。

「タツじゃないですか。被害者ってタツのことですか。西山っていう名字だったのか」

「当時、同じスポーツジムに通っていたようですが、ご存じなかったのですか」

「そんなこともあったかもしれないけど、もう前職のときにちょっと通っていた店のボーイです。もう十何年会っていない」

「当時、ある時から西山は急に羽振りはぶりがよくなったそう。直前に、この店のとある会社経営者が押し込み強盗にあって一千万円の現金を盗まれているんですね」

それがどうしたんだ、と雄二が言う前に、鶴淵刑事は早口で付け足した。

「あなたもその直後、高級車を買ったらしいという関係者の証言がありました。医者なんて新人だとそんなに給料がよくないとぼやいていたそうですが」

「何が言いたいんです？」

焦りを抑えるため、わざと低い声で訊ねる。

「別に……。ただ、人にはほじくり返されたくない過去があるものです。地位を獲得した者なら特に、過去の秘密を知るものを消したくなるでしょう」

婉曲に見えて露骨な言い回しに、雄二は憤りを覚えた。

「札幌脳外科学病院には長らくいらしたんですか？」

「十一年かな」心を落ち着かせ、雄二は答える。「本当は今でも籍はあつて、年に二、三回は行くんです」

「そうでしたか。ではIDカードもお持ちで？」

「ええ」

答えてから思わず目を細めてしまった。IDカードがあれば二十四時間いつでも病院には入れる。鶴淵がそれを確認したかったのかわからないが、この話を続けるのは得策ではない。

「それより、タツの命を狙うような人間はいないんですか、私の他には、なんとか自分を律した。」

「たくさんいます。そちらは別の人間が調べています。正直を言い

ますとね」と、鶴淵は急に態度を軟化させた。

「私だって先生を疑いたくはないんです。ですが、目撃証言があったものですかね」

「目撃証言？」

そんなはずはない。初めから最後まで、誰にも見られないように細心の注意を払ったのだ。それでいて、ラミーズ・フィッシングの客たちがくるタイミングを見計らって死体が早期発見できるように見計らい、死亡推定時刻にずれが生じないようにした。計画は完璧だったはずだ。

「その証言者は、魚になっていたんだというんですよ。イトウです。川で泳いでいて、ルアーで釣られた。釣り上げた男とタモですくい上げた男がいて、タモの男が釣り上げた男の首筋に注射を打って、川に放り込んだというんですね。写真を見せたら、釣り上げた男は西山で、注射の男は正武先生、あなただと言っていますよ」

なんとも言えない、不気味な汗が額に浮かんだ。カヌーの底でびしゃびしゃ飛沫をまき散らしていたイトウの目が思い出される。

「まさか……その奇妙な夢を信じたというんじゃないでしょうね」

「信じちゃいません」

ばか馬鹿にしたように言いながら、鶴淵の目は笑っていないかった。

「ただ、奇妙でも目撃証言がある以上、調べなければならぬ」

す。正武先生、六月二十二日の午後三時前後、どこで何を？」

もしものときに用意しておいてよかった。こちらには、完全なアリバイがある。

「二十二日は、午後二時から午後六時まで手術をしていました」

「どこですか？」

「この部屋で」

奥にあるGALLENOSのサージョン・コンソールを指さす。

「先ほど話題に出た、遠隔手術のGALLENOSですよ。患者はもともと札幌の吉見よしみという患者だったが、東京の病院からさらに緊急性の高い患者をお願いしたいと依頼されて、……ちよつと待つてくださいね」

パソコンを操作し、患者の情報を出した。

「東京都目黒区の柿かきの木坂総合病院に運ばれた瀬田浩太さん、三十二歳の男性です。かなり難しい手術でした」

「鶴淵はしばらく雄二の顔を見ていたが、ぼつりつぶやいた。

「世の中には本当に奇妙なことがあるものですか」

「はい？」

「実はここに来る前、その総合病院には問い合わせられているんです。つまりもう、正武先生のアリバイは確認済みです」

ただ、と皺しわの寄った額を搔きながら、鶴淵は続けた。

「さつきお話した、夢の中でイトウになっていた人というのが、その患者さんなんですよ。瀬田川リギョという名前で活躍しているアーティストさんです」

*

ぴちゃ、ぴちゃぴちゃ、と水が顔にかかるような感覚がして、ふっ、と雄二は我に戻る。

なんだ、今の、眼前を泳ぐ魚にひれで顔を触られたような感覚は。疲れているのだろうと思いつつながら、時計を見る。鶴淵刑事が帰ってからもう一時間以上経っていた。論文は全然進んでいない。

頭の中に、鶴淵刑事の疑わしげな声がよみがえる。

——GALENOSというのは、医者が一人で手術をするそうですな。

しかし、その手術で患者が治っているのだからアリバイは証明できるでしょう。雄二の言葉に一応は納得するそぶりを見せ、鶴淵刑事は退散することになった。しかし、部屋を出ていきざま、再び雄二の顔を振り返った。

——本当に奇妙なことですよ。殺人現場の目撃者と、アリバイの証明者が同一人物だなんてね。もつとも、目撃談のほうが夢の中な

のでは、アリバイのほうを優先せざるを得ませんな。

失礼しますと頭を下げて行ったが、最後に雄二の顔を見たその両目に、疑いの色が宿っているのは間違いなかった。

ばかばかしい。

たしかに西山が釣り上げたイトウは、雄二の犯行時に唯一居合わせた目撃者といえるだろう。だが、アリバイ作りに利用した患者が夢の中でのイトウの視点になっていただなんて……。

ありえない。信じるわけがない。俺は医者だぞ。

そう言い聞かせるたびに、胸の中から何かすっぱいものがこみあげてくるようだった。たまたま、パソコン画面に、二枚のレントゲン写真を映し出す。

大丈夫だ。俺の犯行を証明するものなど、何もない。

5

福岡県・新わかば脳外科病院。

御園正太郎みそのしょうたろうが昼食を買ってコンビニから帰ると、研修医の北見茂きたみしげ也やが駆け寄ってきた。

「御園先生、聞きましたか。稚内の正武先生の話」

「正武先生？ いや……」

「殺人事件の参考人として、事情聴取を受けたらしいですよ」

きつね 狐のような目を細めて、北見は声ひそを潜めた。

「なんだい、殺人事件って」

「薬物を注射されて川に放り込まれた溺死事件だそうです。被害者の男が正武先生の古い知り合いだったそうで、なんでも正武先生には動機どうきがあるとか。……まあ、稚内のセンターに赴任した先輩に訊いた噂うわさですけど」

自室に向かう正太郎に、北見はついてきながらさらに話を続けた。

「正武先生が殺したっていうの？」

「いえ、正武先生のアリバイはすぐに証明されました。というのも、被害者の死亡推定時刻が二十二日の午後三時前後ってことで。その時間、正武先生、脳外科の手術をしていたから」

「二十二日？ ああ、俺のところにも急遽きゅうきょGALLENOSの患者の手術が回ってきた日か。札幌脳外科大学の吉見さん」

本来は正武医師が執刀する予定だったが、東京の患者のほうが深刻だからという理由で正太郎に回ってきた患者だった。

瞬間、正太郎は手術中の不思議な体験を思い出す。GALLENOSを使った手術はもう二十回以上行っているが、あんな経験は初めてだった。

「先生？ 大丈夫ですか、先生？」

「ん、あ、ああ……」

正太郎は首を振る。あんなことは思い出したくない。

「なあ北見君、正武先生が執刀することになった東京の患者、なんて言っただけ？」

「瀬田川リギョですよ。『魚のアーティスト』って二つ名があって、動画のコマーシャルなんかも手掛けていますよ」

白衣から取り出したスマートフォンを器用に操作し、北見は映像を見せてくる。リンゴの皮をむくと皮と果実のあいだから、魚が次々と湧き上がってくる映像だった。

耳元にぴちやぴちやと水音が聞こえた気がした。

「ああ、ありがとう、もういいよ」

逃げるように自室に駆け込み、パソコンの前に座る。そして、二日に手掛けた患者のレントゲン写真を映し出した。『札幌脳外科大
学病院、吉見睦、五十歳』。職業は『警備会社社長』だという。右後
頭部にクルミ大のリーマス型腫瘍。

GALENOS専用の映像ゴーグルを装着し、手術をした時の不可思議な現象を、正太郎は思い出す。腫瘍にレーザーを当てた瞬間、破けた腫瘍の中から、たくさんの魚が飛び出してきて、ゴーグルの中を泳ぎ回ったのだ。

ぴちや、ぴちやぴちや……聞こえるはずのない水音。鼻腔には鱗

の生臭ささえ広がった。一度ゴーグルを外して深呼吸した後、手術に戻った。魚はもう見えなかったが、耳元の水音はしばらく続いた。

患者の脳内のイメージがGALLENOSを通じて伝わってきたのか？

そんなことあるはずがないが……自分が手術をした患者は本当に吉見睦だろうか、と思う。

たとえば、吉見睦と瀬田浩太の腫瘍の位置が、偶然一致していたとしたら？ 手術依頼を受けた正武は、二十一日の昼、レントゲン写真を見てそれに気づき、アリバイに利用することにしたのではないか。

吉見の手術を正太郎に回し、瀬田浩太の手術を受け持つと東京の病院に返事をする。

そしてすぐに、殺害する相手に連絡を入れ、二十二日に稚内へ来るよう誘う。

次に札幌へ飛び、深夜になって脳外科病院に忍び込み、吉見の手術を密かに行ったのだ。あの病院のIDカードを持ち、天才的な技術を持つ正武医師ならたやすいことだろう。

GALLENOSによる手術では、現地の医師は患者を機械の中に横たわらせたらずらに終了まで一切オペ室に入ることが禁じられている。実は吉見の手術が前もって終わっているなど夢にも思わないだろう。

一方で正武はG A L E N O Sの開発者だ。システムについては誰よりも詳しい——新わかば総合病院のサージョン・コンソールを、誰にも知られず、札幌脳外科大病院に見せかけて目黒の病院に上げることもできるのではないか。

ここまでの細工をしておいて、翌二十二日、正武は稚内に戻って被害者と釣りへ出かけ、正太郎が吉見睦と信じ切っている瀬田川リギョの手術をしているあいだ、悠々と殺害を実行する——。

「まさか」

正太郎は思い浮かんだばかりの自説を笑いとばす。

ぴちや、ぴちや、……ばしゃばしゃばしゃ！

水音が聞こえる。耳を塞いでも無駄だった。

頭の中で、魚が水しぶきを上げて暴れ回っていた。

魚のアーティスト、瀬田川リギョ——目の前のレントゲン写真、二十二日に手術をした相手は、吉見睦ではなく、やはり瀬田川リギョであるように感じられてならなかった。

はつきりさせなければ、この水音は消えないだろう。正太郎はデスクの電話の受話器を取り、外線ボタンを押す。

警察署の電話番号を押す正太郎の目の前、パソコンのディスプレイの中に、まだら模様の大きな魚が何匹も泳いでいくのが見えた。

(終)